

Dec. 12 2007

JEKS (The Japan Electronic Keyboard Society)

News Letter

No.5

日本電子キーボード学会ニュースレター ～日本電子キーボード学会「第3回全国大会」特集号～

目 次

1. 大会スケジュール	2
2. 大会について	3
・あいさつ／鷺山恭彦、吉田泰輔	3
・基調講演要旨／三澤洋史	文責：森松慶子 4
・パネルディスカッション - I “電子オルガンの認知度を高めるために”	報告：柴田 薫 6
赤松英彦、金澤素子、安井正規、三澤洋史	
・パネルディスカッション - II “M.L.の現状と将来展望”	報告：小倉隆一郎 8
影山建樹、森崎貴敏、脇山 純、柳田孝義	
・研究発表 ROOM I／佐藤文行、清水徳子、森下絹代	報告：安藤恭子 10
・研究発表 ROOM II／松本裕樹・阿方俊、金銅英二、山中秀樹	報告：海津幸子 11
・研究発表 ROOM III／中地雅之、赤津裕子、大串和久	報告：仁田悦朗 11
・研究コンサートレポート	阿方 俊 13
3. 全国大会の感想	
・日中の更なる交流を望む	繆薇薇 14
・第3回全国大会コンサートに参加して	前木洋美 15
・学会で感じたこと	宮本紘子 15
4. 事務局からのお知らせ	
・学会誌「電子キーボード音楽研究」vol. 3 投稿者募集	16
・学会誌「書式の原則」改定について	16
・編集後記	16

日本電子キーボード学会 事務局

〒215-8558 神奈川県川崎市麻生区上麻生 1-11-1 昭和音楽大学内 阿方 or 生頼気付

Tel : 044-953-1121 Fax : 044-953-1311

H.P. : <http://www18.ocn.ne.jp/~jeks/> E-mail : jeks@snow.ocn.ne.jp

第3回全国大会

主 催：日本電子キーボード学会第3回全国大会組織委員

と き：2007年10月7日（日） 10時半～18時

と ころ：東京学芸大学（東京都小金井市貫井北町4-1-1）

スケジュール

10:00	≪受 付≫ (芸術館ロビー)		
10:30	ごあいさつ 鷲山恭彦(東京学芸大学長) 吉田泰輔(学会代表)		
10:45	基調講演 三澤洋史(第二国立劇場指揮者) 「電子オルガンによる、オペラ、ミュージカルなど劇場音楽上演の実践と将来について」		
11:15	総 会		
12:00	≪昼 食≫ (飯島会館)		
13:00	パネルディスカッション		
	パネルディスカッション - 1 (Room - 1)	パネルディスカッション - 2 (Room - 2)	
13:00	“電子オルガンの社会的認知度を高める” パネラー：赤松英彦 金澤素子 安井正規 アドバイザー：三澤洋史 司会・進行：赤塚博美 柴田 薫	“M.L. ^(注) の現状と将来展望” パネラー：影山建樹 森崎貴敏 脇山 純 アドバイザー：柳田孝義 司会・進行：小倉隆一郎 富田英也	
14:30	≪休 憩≫		
15:00	研究発表		
	Room - 1 司 会：安藤恭子	Room - 2 司 会：海津幸子	Room - 3 司 会：仁田悦朗
15:00	①演奏の現場から電子キーボードをめぐる課題を探る 佐藤文行	②中国の電子オルガン界 中国電子オルガシンポジウム報告 松本裕樹・阿方 俊	③教員養成教育における 電子キーボード活用の可能性 中地雅之
15:30	④電子オルガンとオペラ 電子オルガンオリジナルオペラ 清水徳子	⑤電子オルガンの歴史的考察 (3) 鍵盤の変遷 金銅英二	⑥幼稚園教諭・保育士養成過程 でのM.L.の活用 赤津裕子
16:00	⑦エレクトーンによる クラシック奏法の一考察 森下絹代	⑧小学校音楽教育と 電子オルガン 山中秀樹	⑨M.L.活用の 「やさしい」伴奏付け 大串和久
16:00	≪休 憩≫		
17:00	≪研究コンサート≫ (芸術館) シングルキーボード・アンサンブルによる演奏表現の可能性 ① J.S.バッハ フーガの技法より ② C.C.サン=サーンス 動物の謝肉祭より 演奏 東京学芸大学 中地雅之、田城章子、大学院生、学部学生 司会：初山正博		
18:00	≪懇 親 会≫ (飯島会館)		

第3回全国大会について

ニュースレター第5号は「第3回全国大会」報告です。今回、本学会としては初めての2つのパネルディスカッションが行われ、活発な意見交換がされました。ここでは、学会をより活性化していくために研究部会を設けていきたいという意見が出ました。これを受けて第1回幹事会（11月10日）で、M.L.関連の研究部会体制が承認されるなど新しい動きが出てきています。

なお報告書に関連するものとして、今までの「大会要項」と第1回と第3回の「研究コンサート」（映像付）がホームページにアップされていますので、ご覧いただきたいと思います。

あいさつ

鷺山恭彦（東京学芸大学学長）

日本電子キーボード学会第3回全国大会が本学で開催されますことは大きな名誉であり、大変うれしく、心からお祝い申し上げますと共に、沢山の成果を期待しております。

生の楽器の音に対して電子媒体を通じて出た音は、人類の生み出した科学的発展の顕著な成果であり、宇宙からの音ともいえるその音は大きな可能性を秘めています。

最近の学生諸君を見て思うことは、生活体験の少なさであり、それに起因する問題が多々生じています。知識や情報が全部バーチャルで、身体性に媒介されていないことに一因があると思います。人間は具体的対象と格闘して初めて、知識が身につく、知恵や技術となって体得され、それが生きて活用できるのです。電子キーボードを相手にどのような可能性を開いていくのか。これは身体性の回復の点からも、電子媒体の音のもつ可能性を究めていく意味でも、大変大きな意味があると考えています。

研究コンサートは本学にふさわしく、小中学校で多く使われている電子キーボードを用いて「アンサンブルによる演奏表現の可能性」を探ろうとするものです。その成果が広く共有され、これからの音楽教育に大きなインパクトをあたえることを祈念しております。

あいさつ

吉田泰輔（日本電子キーボード学会代表）

私どもの学会も、ようやく第3回目の全国大会を開催することができ、今回ご尽力いただいた東京学芸大学学長鷺山先生はじめ、関係者の方々に厚く御礼申しあげたい。また電子キーボードを対象とする学会の性格上、企業の支援も頂いての開催である。

本学会は、理論的な研究活動のみならず電子キーボードを用いた表現、演奏などの日々の活動も学会活動に取り込んだ特色ある学会であり、それゆえの難しさもあるように思われる。電子キーボードの機能などは常に変わり、同時に電子キーボードを使う社会的なバックグラウンドもどんどん変わっていく。その中で、従来通りの電子キーボードを用いた音楽活動がそのまま社会に受け入れられるのかどうか。また、そうしたことを背景としつつ教育活動にどのように電子キーボードが活用され得るのか。そういったことがこれからの音楽文化にとって大きな問題である、という意識も踏まえてこの学会が立ち上がったことに、改めて思いを致す。現在進行している数々の驚くべき変化は、今後もずっと続いていくだろう。そうした変化に対して、この学会が何らかの貢献ができるような場となることが望まれる。お集まりの皆様にも、今後一層邁進していただけるよう、また、本日の研究発表やパネルディスカッションなどがそのための実り多きものであることを祈念して、ごあいさつの言葉とさせていただきます。

基調講演要旨

電子オルガンによるオペラ、ミュージカルなど劇場音楽上演の実践と将来 ～ハイブリッド・オーケストラの問題点と可能性～

三澤 洋史 (新国立劇場合唱指揮者)

私の専門は声楽を伴う管弦楽の指揮で、現在新国立劇場で上演されるオペラのほとんどに関わっている。また後述のキッズ・オペラでは編曲と指揮を担当した。加えてこれまで3つのミュージカルといくつかの劇場作品を書き、こうした活動の中で電子楽器と様々に関わってきた。私は電子楽器と生楽器によるアンサンブル、いわゆるハイブリッドオーケストラがいろいろな意味でオペラやミュージカル上演に相応しい形態であると考え、積極的に取り入れてきた。通常電子楽器は、経済的な事情で使われる。オーケストラを雇う費用はなく、ピアノだけでは寂しい。ピアノに弦や管を少数加えてもサロン音楽的な響きになる。そこでハイブリッドオーケストラの登場、というのが通例であろうが、私は長年の経験から違う考えを持っている。

はたして大ホールはオペラ上演に相応しい環境なのか。オペラ上演にオーケストラを用いることでオーケストラピットを備えた大ホールが必要になり、広い舞台に見合った舞台芸術やスタッフ、それなりの人数の合唱団、それらをまかなうに見合う客席数が必要になる。私は1800席の新国立劇場で毎日仕事をしているが、300席足らずの国立市民芸術ホールで「こうもり」「椿姫」をハイブリッドオーケストラで上演した際の聴衆の反応が忘れられない。「今まで何回もこのオペラを見たが、今回初めて内容がわかり、その内容に感動できた」と知り合いが口を揃えた。大ホールでは聴衆と演技手の間に距離がある。4階席からオペラグラスで見ても細かい表情まではわからない。300席くらいの小劇場ならば客席の後ろまで表情も見えることを念頭において演出する。ホールの大小で作品に対するアプローチが変わるのだ。

また、ハイブリッドオーケストラはダイナミクスが自在だ。通常のオケでは指揮者が歌詞を聴かせようとオケを抑えても限界があり、歌手もオケに負けまいと声を張り上げ、歌の細かいニュアンスは失われがちだ。小劇場でハイブリッドオーケストラを使うと歌詞がよく聞こえてオペラの内容が聴衆により良く伝わる。以上により、私はハイブリッドオーケストラを単なるオーケストラの代用ではなく、新しいオペラの一形態を開くものであるとすら考えている。

新国立劇場では2004年に子供のためのキッズ・オペラを企画し、私はワーグナーの「ニーベルングの指輪」を1時間ほどの「ジークフリートの冒険」というオペラに編み直した。ここで第1、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスの5人とフルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン、打楽器にエレクトーン奏者2名のハイブリッドオーケストラを起用し、これが成功して翌年も再演、さらに2006年には新作の「スペース・トゥーランドット」が上演された。「ジークフリートの冒険」は終曲以外ほぼワーグナーのスコアに忠実に演奏し、一方「スペース・トゥーランドット」では大胆な編曲を施して編成は弦5人に打楽器2人、トランペット、アルトサクソ、トロンボーン、ピアノ、エレクトーン2人であった。

これらの上演ではエレクトーン以外は東京フィルハーモニー管弦楽団のメンバーであったが、「ジークフリートの冒険」の初演に際して、それまでハイブリッドオーケストラでは表面化しなかった問題が浮上した。弦楽器奏者が「演奏のタイミングが全く合わないのでエレクトーンの音を聴かずにすむ

ようにして欲しいと」申し入れてきたのである。それ以前のハイブリッドオーケストラは、その公演のために集まったメンバーによる編成だったが、このときはいつも一緒に演奏している東フィルのメンバーであり、また「指輪」をフルオーケストラで演奏したことがあった。相当編曲されていたら気にならないのだろうが、同じスコアでエレクトーンが入るのには違和感を拭えなかったようだ。

オーケストラでは団員が個々に指揮者の打点に合わせて演奏するわけではない。それぞれ楽器の発音特性が違い、高音の楽器は発音が早い低弦などは鳴るのに時間がかかるので、奏者はそれぞれ微妙な間をとる。またオーケストラは一種階級社会で、各パートのトップ奏者は2番奏者を完全に自分に合わせさせ、トップ奏者同士がお互いに合わせて演奏する。その中に電子楽器奏者が入って指揮者の打点にピッタリ合わせて演奏すると、どうしてもずれてくる。弦をエレクトーンで補強する際、弦より早くエレクトーンが発音する。また管の音をエレクトーンが出す場合もトップでなく指揮者に合わせるため、管楽器奏者は吹きにくい。これではアンサンブルにならないということで私がその時採った解決策は、透明なアクリル板を間に置いてエレクトーンの音を他の奏者に聞こえないようにすることだった。エレクトーン側にはモニターをつけて他の奏者の音を流し、それに合わせて弾いてくれるようお願いした。エレクトーン奏者には面白いことではないが、これはハイブリッドオーケストラがいつかは直面するべき問題で、東フィルのメンバーがこの時見事にそれをついてくれ、その後の私の活動の大きな指針となった。エレクトーン奏者を他の奏者と隔離するのは新国立劇場だったからできたことで、一番良いのは電子楽器奏者が生楽器の音の出方やニュアンスを学習するというのである。「ジークフリートの冒険」のエレクトーン奏者伊藤佳苗さんと塚瀬万起子さんは辛い思いもされたがこのことで生楽器奏者の生理も非常に良く理解し、オケのメンバーとも仲良くなって問題は起きなくなった。奏者としての彼女達の存在は非常に大きい。

さらに音色の問題もある。オーボエは音のアタマが出やすくフルートは息の音が混じりやすい。奏者達はレガート奏の際そうした特色をなるべく出さないように努力するのだが、電子楽器は各楽器音の個性を出すためにそうした要素も再現してしまう。曲想に応じて音色を変えるのか、それともインシタルタッチ、アフタータッチなどで奏者が解決できるのか。これらをどこまで奏者が引き受けられるかが大切だろう。奏者が生楽器を深く理解した上で、何をもってリアリティとするのか、真に望ましいのは何かを判断する力が望まれる。ビブラートのかけ方、奏法の違いによる各楽器のニュアンスの違いなどにもエレクトーン奏者が関心を持ち、自らの演奏表現に消化することが肝要である。

PAにも注意が必要である。トーンキャビネットをどう配置するか。奏者が演奏しやすく聴衆に自然に聞こえる位置は会場によって様々だ。PAひとつでそれまで作り上げたアンサンブルが壊れる危険性もある。そうした問題に対する関心と対処も忘れてはならない。

それらを全てクリアしても、なお電子楽器に抵抗がある人はいる。新国立劇場の小ホールで2000年にオペラ公演をした際、小林由佳さんのエレクトーンを編成に加えたい、と企画部に申し込んだところ電子楽器に対する偏見の壁にぶつかり、説得が大変だった。結局公演は大成功で、その後のエレクトーン起用にも良い前例となってくれた。電子楽器に対する偏見はまだ強いが、これが現実でもある。演奏者同士や聴衆に、これなら電子楽器を使った公演も良いと思われるよう地道な努力を続け、焦らずひとつひとつオペラ上演を積み重ねることで、社会の賛同を得ていきたいと考えている。

(文責 森松慶子)

パネルディスカッション - I “電子オルガンの社会的認知度を高めるために”

報告：柴田 薫

パネラー：赤松英彦（くらしき作陽音楽大学）、金澤素子（音楽演奏団体代表）、安井正規（E.O.演奏家）
アドバイザー：三澤洋史氏（新国立歌劇場合唱指揮者）
司会・進行：赤塚博美（洗足学園音楽大学）、柴田 薫（昭和音楽大学）

電子オルガンが、いわゆる「外の世界」での音楽活動に参加し、役割を果たすようになってからかなりの時間が経過してはいるが、まだまだ課題も多い。ここでは、教育機関、協奏曲演奏の制作、ソロ演奏という各分野で活躍中のパネラーから、電子オルガンを活用した演奏・制作の事例紹介を受け、パネルディスカッションを行った。アドバイザーとして基調講演を行った三澤洋史氏にも参加していただき、以下の2部構成で討論が展開された。

第1部 パネリストによる情報提供と問題提起

①教育機関での事例 くらしき作陽大学における電子オルガンによるミュージカルの試み 赤松英彦（くらしき作陽大学）

くらしき作陽大学では、2002年ミュージカル専修第1回卒業公演以来、電子オルガン学生の伴奏によるミュージカル公演を継続的に行っている。ミュージカル公演は、地元メディアにも大きく取り上げられる等、学内外の多くの聴衆に電子オルガンへの理解を深めてもらうための良い機会となったと感じている。

現在、指揮者なしのソロ演奏のスタイルで伴奏を行っているが、これは本番までの限られた時間内で学生の音楽力に合わせて…という、限られた（限定された）条件下において選択したスタイルである。電子オルガンによるミュージカルの伴奏では演奏形態以外にもアレンジのプロセスや学生の普段の学習の在り方など、まだまだ多くの問題を抱えている。他の楽器の人々（他の科目の教官など…）からの認識を得ることの大変さも痛感している。

これから、ベートーヴェンの第九を演奏する提案も出てきており、さらに電子オルガンの可能性を追求し、より豊かな響きを求めていきたいと考えている。

②ピアノ協奏曲演奏公演の制作活動の事例 電子オルガンによるコンチェルト演奏の意義 金澤素子（エレクトーンアンサンブル K2TY 代表）

ピアノ学習者にとってピアノ協奏曲を勉強できる機会は必ずしも多くない。ピアノを弾く者にとって協奏曲においては、オーケストラの主張に耳を傾けたり、自分の主張を提示したり、オーケストラとの対話を楽しんだり…等の体験ができる。こういったことは音楽をより客観的に見つめることを可能にし、スケールの大きい演奏へと変っていく契機となるだろう。

私達の演奏団体はこの10年の間、電子オルガンの豊かな音色を使ってオーケストラを表現することを試みており、電子オルガン2～3台と指揮者、そこにソリストを迎えるというスタイルで、ピアノ協奏曲だけのコンサートを行っている。これまでの出演者数は、のべ165名、演奏された曲目は、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、グリーグ、ラフマニノフなど50曲にもなる。2台ピアノで協奏曲を体験するのは違い、指揮者がいること、複数人数によるアンサンブル、音色によってのニュアンス等、実際のスタイルに近いことが利点である。

本番2週間前の勉強会、そして当日のリハーサルと本番、この間にソリスト達は肌で何かを感じとったかのように急激に成長する様を目の当たりにしている。実際、子どもから大人まで、趣味の人から専門家まで、幅広く参加していただいているが、もっと多くのピアノを弾く方々に電子オーケストラと共演してピアノ協奏曲の魅力を感じていただきたい。そのためには、このスタイルの有効性を知らしめ、ピアノの指導者にもっと関心を持ってもらうことが必要である。そして電子オルガン演奏の側は、本格的な質の高い音楽を提供することで楽器としての知名度を高めていかなければならないと考えている。

③ソロ演奏家の立場から「電子オルガン独奏形態（ソロ演奏）のメリットについて考える」 安井正規（電子オルガン奏者）

もともと電子オルガンは、独奏用（ソロ用）に開発されてきた楽器であり、社会参画の場面において様々な演奏形態が模索・提案されている中で、あえて電子オルガン独奏（以下、ソロに統一された方が読みやすいのではないのでしょうか）ならではのメリットを考えた。

自分の今までの主な演奏事例としては、アテンション音楽やマスゲームの音楽、クラシックバレエ公演での演奏、ピアノ協奏曲や合唱(モーツアルトの《レクイエム》等)の伴奏、式典音楽の制作・演奏、マーチンバンドとの共演、オンドマルトノ（同じ電子楽器同士として…）との共演、学校コンサート等々、行ってきている。

電子オルガン独奏演奏では確かに弾くパートに限りはあるが、多段鍵盤を有し、ポリフォニックな音楽表現が可能、そしてリアルタイムにライブ演奏するという強み…それはあらゆる状況に対応できる。創造的な舞台分野や臨機応変さを求められる催事・式典や、迅速さが求められる音楽製作など…それらは電子オルガン独奏の真価が発揮される場面である。1台の楽器であれば、可搬性も生かせるし（運搬費用も少なく）、音響調整も容易であり、そして（その観点から）シンプルな形態というのが社会化につながるだろう。

電子楽器ならではの音作り・電子オルガンならではの音楽表現の追求、現場や実践に即した即興性や作編曲の研究、楽譜や音源記録の共有化、が今後の課題と考えている。

以上を受けてアドバイザーの三澤氏は、

①に関して、電子オルガンが現状ではポップス面に強い音色を有していて、ミュージカルなのでそれが生かされていた（クラシック演奏では苦労がある）。

②に関して、ピアノ学習者がピアノ協奏曲を学ぶ機会を広げる（広げる機会となる）だろう。

③に関して、電子オルガンは、電子楽器でありながら、インタラクティブな情報交換が可能というライブ感、アドリブ性が要になっていく。また、一人で弾いているという驚きも価値になるだろう。

と述べた上で、電子オルガンの楽譜の共有化はこの会の最大の提案になると指摘。

「電子オルガン用の楽譜化はとても重要である。電子オルガンではスコアであれ、作編曲された楽譜であれ、奏者にはアレンジの作業がある。電子オルガン用の楽譜というのは書き方が難しいだろうし、ピアノの楽譜のようにただ弾けばいいというものでもないであろうが、あればヒントにもなるだろうし、それをベースに発展していける。やってみようという人も増えるだろう。」

第2部 参加者とのディスカッション

第1部を受けて参加者たちと活発な意見交換が行われた。以下にまとめたものを掲載する。

「クラシックの楽曲その全てを再現する、それができなければその曲はやらないくらいの電子オルガン側の自己規制も必要ではないか。ただ社会的認知のためには、もっとポジティブな面を見出さなければならない。ハイブリッドオケでは電子オルガンはアンプ代わりのようなだったり、協奏曲ではソロに耳が行ったりする。既存の楽器には無理なこと（例えば、ばてない金管のような…）に新たな効用を見出す道もありか？」（野口剛夫氏）

「指揮者の立場で言えば、オーケストラのものは、やはりオケ。ハイブリッドオケはオケが入れない空間でサウンドを作り出せる利点がある。電子オルガンが色どりを、生楽器がリアリティを担うと考えている。」（三澤氏）

「ソフトを定番化し共有することは重要である。電子オルガン奏者は編曲者でもあり、その特異性も認知されるべきである。音楽制作の立場から言えば、費用やPAのことを考えて電子オルガン1台で出来る事を追求したい。」（佐藤文行氏）

「実際、学校コンサートなどで（などでは）自分で楽器を持ち込んで、ということは多い。現在のヤマハのELSになって分解・組み立てが容易になったことは有難い。」（安井氏）

「大学やヤマハなどのメーカーが絡まない場合の楽器や音の出口（PA、アンプスピーカー）の調達など、費用面で困難となってくる。公演援助のシステム化なども求められる。」（赤松氏）

「社会的認知ということには、やはり楽器のためのオリジナル作品が不可欠である。」（西山淑子氏）

電子オルガンの特性をライブ性、臨場感と捉える共通理解の下、有意義なディスカッションが開かれた。定番ソフトの開発、人材の育成、ビジネスとしての確立…と今後の課題も見据えて、学会としては研究部会設立が責務ということで、会が締めくくられた。

パネルディスカッション - II “M.L.の現状と将来展望”

報告：小倉隆一郎

パネラー：脇山 純（平成音楽大学）、森崎貴敏（ヤマハ音楽院・昭和音大）、影山建樹（清見潟大学塾）

アドバイザー：柳田孝義（文教大学）

司会：小倉隆一郎（文教大学）、富田英也（白鷗大学）

Music Laboratory(以下 M.L.と略)は 1970 年に音楽教育現場に登場して以来、主として教員養成分野において活用が進み、指導方法の研究が行われてきた。現在、M.L.は多様な領域や科目で利用されているが、活用が進むにつれ指導上の問題点・課題も浮上している。そこで、本パネルディスカッションでは、幼児教育・保育、音楽大学、生涯教育、それぞれの現場で M.L.を活用する三名の教員をパネリストとし、また教員養成大学で M.L.を使った授業を行う柳田氏をアドバイザーに迎えて、次の三部構成による討論を行なった。

第1部 パネリストの情報提供と問題提起

・音楽大学「M.L.・・・耳と目を使って」 脇山

音大の「キーボードハーモニー」における M.L.授業ではマンツーマンの指導とは異なり、集団での指導をしている。音はヘッドフォンで伝わるが演奏している姿、手、指の動きが見えないため、「目で聴く」ことの良さをどのように教室で活かせるかが課題である。ノーテーションソフトをホワイトボード代わりにビデオカメラで手を見せる、等々授業での工夫をしながら試行錯誤を繰り返している。

・音楽教室「M.L.30年のキャリアを現場に活かす」 森崎

M.L.のキャリアは電子ピアノを 10 数台並べた教室から始まったが、音楽教室での 30 年近い実験や成果を、昭和音大でより一層定着をさせ、アカデミズムの世界でしか探求できない M.L.の使用法を模索中である。音大「鍵盤ソルフェージュ」の授業における弾き歌いと移調奏の指導事例がビデオを含めて紹介された。

・生涯教育「生涯教育における電子キーボードの活用」 影山

生涯教育の一環としての電子キーボード教室を 12 年にわたって運営している。M.L.ではなく、複数のキーボードによる集団レッスンである。最高齢 84 歳の男性が在籍しており、お年寄りの楽しみとして一人一人とつきあいながら、同じ目的や成果を求めるのではなく、レッスン生個人の表現をつくる工夫を重ねている。受講生の意欲を引き出すには、教師の指導力・教育力が必要である。

・教員養成(幼児教育・保育を含む)「M.L.教室の適当な人数は？」 小倉・富田

本学で開講するピアノ関連科目は「音楽」「器楽表現基礎」「器楽伴奏法」の三種であり、すべて M.L.による集団授業を実施している。「音楽」の授業を実施する中で、いくつかの問題点が現出した。一つは受講者数が多く、M.L.の学生用キーボードの台数(42 台)を上回るクラスがあったこと。二つ目は、ピアノの学習経験が少ない初心者が履修者の約 1/4 を占める点である。近年、ピアノの学習経験が少ない学生が増加傾向にあることを考え合わせると、40～50 人といった集団指導は難しいのではないだろうか。(小倉)

小学校の教員免許取得のコースを増設したことによって M.L.は 40 人前後のクラスで授業を行なっている。M.L.の子機は対面式の配置を採用している。ピアノのグループレッスンと M.L.の指導を併用しており、それらの連携が困難である。この点に関する改善が今後の課題となろう。(富田)

第2部 参加者の情報とコメント

フロアーよりの質問・意見とパネラーの回答が述べられた。

- 1.学生の状況は画面で見られるのか(相愛大:赤石)→学生個々の様子は見られない(脇山)
- 2.生徒一人のレッスン時間はどれくらいか(兵庫大:大串)→10分から30分を超えるものまで、まちまちである(影山)、M.L.と個人レッスンのバランスは(大串)→M.L.2名+個人レッスン1名の教員が指導している(富田)、初心者への指導はどのようにしているのか(大串)→音大のM.L.授業では最低でも Czerny30程度の学生が受講する(森崎)・キーボードハーモニーでは初心者も対応可能である(脇山)
- 3.障害のある方への自動伴奏の指導方法と生徒の反応について(静岡県立大:宮脇)→左手三和音でリズムにのせる練習をする・障害の有無で差別をしない・現代的なリズムに抵抗感はない(影山)
- 4.授業はヘッドフォンを使うのか(竹早教員養成所:谷口)→ヘッドフォンとスピーカーが半々(影山)、楽譜と選曲について(谷口)→著作権の有る楽譜は受講生に提供していない(影山)、譜読みについて(谷口)→楽譜は補助的に使用している(影山)、意欲を喚起する方法(谷口)→受講生のキーボードで模範演奏をする等の工夫をしている(影山)
- 5.バイエル・子どもの歌等のテキストについて(竹早教員養成所:阿方)→幼保の採用試験にバイエルの課題は少なくなったため、他の教材も検討中、子どもの歌については編曲に問題がある(小倉)
- 6.M.L.を導入する学校が増加し、最近では年間十数校が新たに設置している。今後、教育現場におけるソフトの仕様を視野に入れてハードの開発に活かしたい(ヤマハ(株):中村)

第3部 課題のまとめと今後の活動への方向づけ(柳田)

第1部および第2部の討論で、M.L.の活用については近年、多面的な展開が進んでいることが明らかになった。そこで、M.L.分科会の活動活性化へのコンセンサスとして、研究部会を設立することを提案する。M.L.研究部会の活動から新しい研究成果の発表へつながることを期待したい。各大学で点検・評価が実施されているが、とりわけ目標・目的の達成度が注目されている。M.L.の授業において、目標を達成し学生が音楽をする喜びを感じるために、どのような考えをもっているか、について各パネラーから意見が述べられ、ディスカッションを終了した。

研究発表 Room1

報告：安藤恭子

演奏の現場から電子キーボードをめぐる課題を探る～19年間、220回の公演・コンサートを通して～
佐藤文行（二期会・音楽プロデューサー）

発表内容は、自らがプロデュースするオペラ・コンサートを通しての、まさに現場の声であり、活動する電子オルガン奏者誰もが抱えている課題をも示した内容であった。声楽家でもある発表者は、ステージ上から感じる電子オルガンの必要性を、非常に色彩感が豊かに表現でき、大きな空間に響き渡る楽器として実感すると述べた。

電子オルガンの技術的発達に伴い、機種変更もある中、19年間この楽器でステージとのコラボレーションを試みてこられ、非常に貴重な発表であった。そこでは、ステージ音楽を創り出す奏者が存在することも忘れてはならない。電子オルガン奏者には、モチベーションがどのように作られていくか、どう表現していくかの問いかけもあった。また、演奏家を、子供の頃からアカデミックなものを構築して育成することを、教育現場に提案することを念じている。

プロデューサーとしてのご苦労は計り知れないもので、オリジナル作品開発、仕込み経費節約の連続公演実施、ベテランキャスト起用による準備期間短縮、20年スタッフとのチームワーク、自費での楽器運搬用リフト付運搬車両購入など、取り組みを積み重ねてきた経験の中での、実践発表であった。

電子オルガンによるオリジナルオペラ作品の実践と課題

清水徳子（平成音楽大学）

平成音楽大学における、様々なジャンルと演奏形態での、数多くの電子オルガンの活躍により、熊本県内での電子オルガンの社会的認知度は高く、いかに貢献されてきたかが伺える。

学長でもあり作曲家の出田敬三氏の作品の中から、先日、熊本城築城400周年記念オペラ『南風吹けば楠若葉』を演奏するにあたり、演奏者側からの様々な報告を述べられた。ピアノ譜からの電子オルガン譜をおこすという作業の詳しい内容であった。また短期間での仕込みを効率よくこなす為に試みた点など、興味深く拝聴できた。ピアノで徹底的に行うシミュレーション、歌詞や台本からもイメージを膨らませる等、これらの細かい多くの情報を入れ、サウンドの充実を得ることを第一とされた。仕込みの労力は並大抵のものではないのは十分理解できる。

今回は時間が無かったため、電子オルガン1台での演奏例の発表であり、2台の方がより充実した音楽を提供できるのはいまでも無いと述べられた。同時に1台による利便性についても言及された。それは、指揮者の指示が集中し融通が利く、リアルタイムのパフォーマンスに対応、数台にアレンジする手間が省けることだ。そしてどのようにも対応できる奏者の育成がここでも重要課題となる。

エレクトーンによるクラシック奏法の一考察

森下絹代（エレクトーン指導者）

いい演奏をする演奏者が居ればよい。これは、発表者の開口一番、襟を正す一言であった。多様な演奏形態がある中で、電子オルガンでクラシック音楽を弾くことの意味は大で、目に見えないものの中で構築していくことは精神性の高いものであり、教育の益であると述べた。さらに、アインザッツの必要性、フレージング、デュナーミク、リズム、アゴーギク、これらすべては、楽器を超えて表現せねばならず、演奏は何をどのように語るかがその目的であると言及。その努力を積み重ねるプロセスが不可欠であり、良い演奏の達成感が人格形成となる。また、エレクトーンは自己表現が一番できる楽器であり、アコースティックで得られないダイナミクスなどにより、人の感情をゆさぶると語られた。そして、学習者はCDを絶対視することなく、すべてが書かれている楽譜を信頼し、忠実に分析することの教育的価値についても述べた。学習者は、生オーケストラを聴く機会も少なく、CDに頼るのが現状で、この点についても課題を提案された発表であった。

研究発表 Room 2

報告：海津幸子

中国は電子オルガンの中興の祖となり得るか — 「2007年第1回中国電子オルガンシンポジウム」から見えて来るもの —
松本裕樹（和歌山大学大学院）・阿方俊（昭和音楽大学）

「第1回中国電子オルガンシンポジウム」へ出席した発表者による、中国電子オルガン界の現状と将来性に関する興味深いレポートであった。まず、電子オルガン界を俯瞰することにより教育的視点から演奏分野に至るまでの問題点を洗い出し、現場の視点に立って今後の発展動向を検証していこうとする中国の取り組みが紹介された。シンポジウムでの研究発表の充実した内容は、近年の中国の急速な経済成長と相まって、中国での大きな展開の可能性を感じさせられるものであった。また、欧米における流行と衰退、企業主導の日本における芸術と公教育の場での浸透の遅れ、それらを踏まえた上での中国での取り組みには、電子オルガン音楽・教育へのヴィジョンが明確に打ち出されており、電子オルガンの中興の祖として、その可能性を世界に発信していくものとなることが期待させられる報告だった。

電子オルガンの歴史的考察（3）— 鍵盤の変遷から見た電子オルガン —

金銅英二（松本歯科大学大学院）

パイプオルガンから現在の電子オルガンに至る歴史を、鍵盤の機構や機能という視点から考察した発表であった。パイプオルガンの変遷を歴史的背景との関連で説明され、また、スイッチである電子オルガンの鍵盤機能の変遷を鍵盤数や鍵盤の形状とともにたどり、多様化によって曖昧になりつつある電子オルガンの定義を鍵盤の機能から定義しようという試みであった。現時点でのマニュアル鍵盤での「捏ねる奏法」、ペダル鍵盤の「膝以下で蹴る奏法」における問題点を提起し、タッチ多機能のみならず、多列接点を意識した奏法にも注目すべきではないかという提案がなされた。

小学校音楽教育と電子オルガン

山中秀樹（山口県山口市立小鯖小学校）

まず、小学校での電子オルガン活用の現状についての報告と分析がなされた。電子オルガンは教育用楽器としては高価格であるが、その導入率の割には稼働率が低い。現場での楽器移動の問題、また、教師に楽器の特性をいかした活用法が認知されていないとの問題点が指摘され、その背後にある教員養成大学での学習の場や音楽愛好家のための学習の場が少ないことにも言及。何よりも教育現場で電子オルガンを活用できる人材の育成が大きな課題である。発表者自身が指導・演奏を担当した演奏会の紹介（VTRによる）では、小学校での和音学習における有効性や、合奏への導入による教育効果が具体的に説明された。電子オルガンの活用により音楽の楽しさを伝え、生徒の音楽学習意欲の向上を実感している発表者の熱意が伝わる研究発表となった。

研究発表 Room 3

報告：仁田悦朗

教員養成教育における電子キーボード活用の可能性

中地雅之（東京学芸大学）

ここでは、教員養成課程における電子キーボードを活用した授業の実際が、VYRの提示などと共に紹介された。

音楽を専攻としない学生を対象とした授業、音楽専攻学生を対象とした授業、そして大学院科目と

しての音楽の授業の3つについて、それぞれの授業の趣旨と内容に即した電子キーボード活用の事例が示された。

特に、音楽経験の浅い学生に対して準備された指導の手だては、キーボードを用いながらも、楽しく無理なく学生が抵抗を感じずにいつの間にか、キーボードに触れることを通して「音楽活動に参加」できてしまうかのようなきめの細かさと配慮に満ちたものになっていることがビデオ試聴を通して窺えた。学生相互のコミュニケーションによって運指や鍵盤、音名、そして演奏まで、相互に関連づけられた学習が展開されている様子が窺え、楽器を演奏しながら無理なく音楽のあれこれについて楽しく学べるような仕組みになっているからである。さらに電子キーボードのみでなく、他の楽器も交えたアンサンブル活動につなげていくことで、より現場での教育実践に生きて働く力や構えの陶冶への配慮もなされているという印象を持った。小学校や中学校では、こうした活動が日常的に行われているが、このような学習を経験した学生は現場でも何の違和感もなく、むしろ自己の経験を生かし、自信をもって児童・生徒の学習指導にあたれるであろうと思われるからである。

幼稚園教諭・保育士養成課程における M.L. を活用した授業について

赤津裕子（竹早教員保育士養成所）

この発表は、卒業生の殆どが幼稚園や保育所への就職を希望している教員・保育士養成課程における音楽の授業の中で、M.L. をどのように生かし、効果を上げているかが具体的な DVD による事例提示も含めて述べられたものである。

まず年を追うごとに増加する傾向にある鍵盤楽器演奏の初心者と、一方では採用試験で初見演奏が課せられる傾向にあるという流れの中で、二年間という短期間のうちに確かな力を身につけて現場で即戦力として活躍できる教員を育てることが求められているという実情が語られた。そこで現場で通用する力や演奏技術を育むことと併せて、音楽のすばらしさを知って子どもたちにより望ましい音楽体験をさせることのできるような「音楽の楽しさを伝えられる能力と心を持った教員を育てる」ことに力点をおいた指導を展開しているという基本的な考えが述べられ、参加者の共感を誘っていた。

中でも、M.L. の特性がもたらす演奏を3つの次元、すなわち「個別 \leftrightarrow 集団」「リアルタイム \leftrightarrow ノン・リアルタイム（録音・再生）」「単一音色 \leftrightarrow 多様な音色」という3次元でとらえ、その座標軸のどこに計画された学習が位置づくか見直し検討することで、学習者の主体性を尊重しつつより M.L. の特性を生かした学習環境を構成することができるであろうという視点が斬新で注目すべきだと強く印象づけられた発表であった。

M.L. 活用の「やさしい」伴奏付けに関する一考察

大串和久（兵庫大学短期大学部）

初心者から経験者まで幅広い層で構成される、保育士並びに幼稚園教諭をめざす学生を対象とした鍵盤楽器に関する集団学習における問題点とその対策について、実践事例と調査をもとに論じた研究発表がなされた。

これは、特に初心者が不得意とする黒鍵を使用した演奏について、その抵抗となる原因の所在に着目し、その抵抗を極力排除して鍵盤楽器の演奏技能や表現力を高めていけることを主眼とした研究実践についての報告である。

具体的には、初心者にも抵抗なく取り組める「やさしい編曲」によるアンサンブル活動を通して演奏の喜びが実感できるような学習の仕組みを整えること、さらにはそうした学習を踏まえて「やさしいスタイルの伴奏づくり」を体験することで、無理なく「おしゃれスタイルの伴奏」に対する意識を高めることが出来、黒鍵演奏に対する抵抗をも自然に克服できる学習環境づくりにつながるであろうとする仮説を柱とした研究である。

さらには、伴奏づくりに必要な知識としてコードネームを位置づけることで、学生自身が必要感を持ち、コードネームについて学習する意味を実感しながら学習を進めることができたということが学習後の調査で明らかになったことから、今後さらに「やさしい」だけにとどまらないよりよき伴奏法開拓に向けて研究を推進していくと締めくくられた。

研究コンサートレポート

「シングルキーボード・アンサンブルによる演奏表現の可能性」

阿方 俊

研究コンサートは毎回、会場担当校の特色を活かした電子キーボードに関するものが開かれている。今年度の担当校は教員養成に特色のある東京学芸大学ということで、小中学校の教育現場で多く使われているシングルキーボード（一段電子鍵盤楽器）に焦点をあてたコンサート、「シングルキーボード・アンサンブルによる演奏表現の可能性」が行われ、電子キーボードの演奏表現に多くの示唆を与えた。ここでは楽器の使い方を中心にレポートする。

なお、参考としてコンサートの一部がホームページ（日本電子キーボード学会または jeks で検索可）の沿革にアップされている。

1. 演奏楽曲と使用楽器

コンサートでは、J.S.バッハ「フーガの技法」より4曲とC.C.サン=サーンス 組曲「動物の謝肉祭」より9曲が取り上げられた。各楽曲と楽器編成は次の表のようになっていた。

演奏楽器と使用楽器リスト

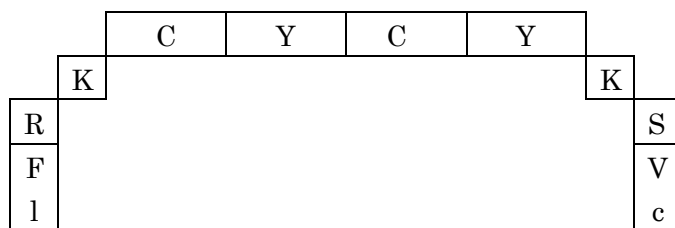
楽曲	楽器	Fl.	R	K	C	Y	C	Y	K	H	Vc
J.S.バッハ「フーガの技法」より コントラプンクトゥス											
I (オルガンの響き)			○	○			○		○		
V (管楽器の響き)			○		○		○			○	
XII-a (オリジナルサウンド)			○	○			○		○		
XII-b (オリジナルサウンド)			○			○		○		○	
C.C.サン=サーンス 組曲「動物の謝肉祭」より											
おんどりとめんどり					○	○	○	○			
ぞう								○			○
カンガルー						○		○			
水族館	○		○		○	○	○	○	○	○	
耳の長い登場人物					○		○				
森のかっこう						○		○			
大きなとりかご	○		○	○	○	○	○	○			
白鳥			○						○		○
フィナーレ	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○

楽器の記号は左側から、Fl=フルート、R=ローランド・シンセサイザー JUNO-D、K=カワイ・デジタルピアノ es1 PERLA、C=カシオ・ミュージックデザイナー CKT-900、Y=ヤマハ・ポータブルキーボード PSR-S700、H=ハモンドスズキ・低音オルガン EB-3000、Vc=サイレントチェロ。

バッハのこれらの作品は、もともと楽器の指定がないため、4人の奏者（ソプラノ、アルト、テノール、バス）が、コントラプンクトゥスIをパイプオルガン、Vを管楽器、XII-aとXII-bを既成楽器の音色に捉われないオリジナルな響きで演奏された。これに対してサン=サーンスの組曲「動物の謝肉祭」では、スコアリーディング奏法でオーケストラ楽器を意識した音色が用いられ、電子鍵盤楽器による室内オーケストラのひとつのあり方を提示した。またここでは、曲と曲の間に上妻春子（修1）の朗読で谷川俊太郎の「動物たちのカーニバル」の朗読が加わるという構成で行われ、音楽鑑賞教室などで子どもたちが興味を示すであろうと思われる内容であった。

2. 楽器配置とノン P.A.

楽器は、下図のように客席からみて、両端にフルート (Fl) とチェロ (サイレント Vc) の間に前述リストの電子キーボードが配置されていた。



【客 席】

ここで特記されることは、電子楽器のコンサートで常識になっているミキサーによる P.A (public address=コンサートなどの音響拡声装置) を用いないで、各楽器に近いところに 1 台ずつのアンプ付のスピーカー (ヤマハ) が客席に向けて接続させられていたことである。このため、オーケストラのように各楽器のところから音が発せられ、いわゆるステージの左右から音がまとめて出てくるステレオタイプの二次元の響きと異なる多彩な音の広がりを感じられた。また、アコースティック楽器のアンサンブルと同様に、視覚 (演奏者) と聴覚 (音) が容易に認識される「音像の一致」が得られたことは評価される。

このノン P.A.の考え方は、ミキサーやそれを操作する人に演奏を委ねるのでなく、演奏者が音量やバランスに関する自己責任を果たすという当たり前の姿勢である。野外コンサートなど特殊な場合は別として、ノン P.A.の考え方を再考させられる問題提起の場ともなった。

演奏者

J.S.バッハ 松原健太、森尻有貴 (修 2)、高鶴ゆら (修 1)、市川 恵 (学 4)

C.C.サン=サーンス 松原健太、森尻有貴 (修 2)、新井伸子、上妻春子、高鶴ゆら、前木洋美、松沢未紗 (修 1)、市川 恵、佐々木大輔、角田愛子 (学 4)、大竹里沙、須山瑞希 (学 1)、田城章子 (非常勤講師/賛助)、中地雅之 (准教授/企画)、初山正博 (世田谷区立明正小学校/解説・進行)。

全国大会の感想

日中の更なる交流を望む

繆薇薇 (上海音楽学院)

日本電子キーボード学会「第 3 回全国大会」に出席させていただき、ありがとうございました。今回の大会出席を通して、日本の電子オルガンを含む電子キーボード界の現状に対して理解を深めることができたと同時に、日本の関係者の方々が電子キーボードの発展および電子キーボードの社会的認知度を高めるために様々な努力をされていることも分かり、非常に感銘を受けました。

電子キーボードは誕生してから数十年しか経ってなく、アコースティック楽器と比べると歴史が浅いため、社会的認知度はまだ高くありません。このような中で日本では、電子キーボードがオペラ、ミュージカル等との提携、アコースティック楽器との協奏についての研究が進んでおり、電子キーボードに関して多くの普及活動が行われています。私達も日本の情熱と努力に励まされています。

電子キーボードが中国に入ったのは 1980 年代の半ばであり、その歴史は長いとはいえませんが、中国における発展状況は非常によいと思っています。まず、電子オルガン専攻を設置した

音楽大学が多いこと、そして各音楽大学内でほかの学科との交流、提携が盛んに行われていることが挙げられます。ミュージカルは中国においても新しい専攻ですが、電子オルガン専攻と結び付いて、人々に受け入れられています。新しく作曲されたオペラ作品で電子オルガンの多く用いられつつあります。また、電子オルガン専攻の学生たちも作曲科の先生、学生が作った曲を演奏するだけでなく、電子オルガンを用いたオリジナル作品を創りはじめました。

日中双方の交流、連携が電子キーボードの更なる発展につながると信じており、お互いの経験を取り入れながら将来に向かって一緒に進んでいくことを望んでいます。(翻訳：汪波)

* 繆薇薇 (ミャオ・ウェイウェイ) さんは、上海音楽学院電子オルガン科卒業後、同学院のミュージカル科の伴奏者としてミュージカル公演やレッスンで活躍しています。

第3回全国大会コンサートに参加して

前木洋美 (東京学芸大学大学院)

私はサン＝サーンスの『動物の謝肉祭』の数曲の演奏に参加しました。本番に向けて練習していく過程でとても良い経験ができましたが、その中のいくつかを記したいと思います。

音色は、練習の際に中地先生を中心に、演奏者自身が試行錯誤をしながら決めていきました。オーケストラスコアを見ながらの練習でしたが、全体の響きを聴き、オリジナルとは違う電子キーボードに適した音色に変えて演奏した箇所もありました。

ダイナミクスに関しては、その表現の難しさを感じました。アンサンブル全体の音量のバランスが今後の課題だと思います。ペダルやバーで調節する楽器での演奏でしたが、自分のパートが主旋律の際は、自然に音量を上げるための試行錯誤がありました。それを通して自分の演奏をよく聴くことができたと思います。

『動物の謝肉祭』は、一つ一つの旋律が美しく、弾く際にとっても緊張感がありました。それぞれが一つの楽器を担当することで、その旋律を感じて、細かく神経を働かせて独奏では味わえないアンサンブルならではの演奏をすることができたように思います。

今回の演奏を通して、アンサンブルにおいて、一人一人が旋律の雰囲気を感じ、全体と呼吸を合わせながらも主体的に演奏していくことの大切さを感じました。

ここで得た経験は、今後のアンサンブル活動だけではなく、独奏でも生かしていくことができると思います。

学会で感じたこと

宮本紘子 (聖徳大学大学院生)

今回はじめて全国大会に参加させて頂きましたが、大変興味深い研究をされている先生方ばかりで、とても参考になりました。特に小学校の音楽教育に電子オルガンを活用した実践の研究発表は、私が大学院にて中学校で電子オルガンを活用した実践授業を行い、有効性を検証した、「電子楽器を主軸とした音楽学習の研究」というテーマと内容が類似しておりましたので、教育現場で活躍されている先生の発表は大変参考になりました。また、電子オルガンの活用方法やソロ演奏、ハイブリットオーケストラなどの研究発表など、先生の立場、学生の立場と、自身を向上させるたくさんの知識や情報を得る事ができ、様々な観点から学ぶ事ができました。

この学会に参加した事により、たくさんの先生方と交流を持つ事ができ、大変有意義な時間を過ごす事ができました。

これからも電子オルガンの持つ機能性・実用性を教育現場に活かせる事ができるよう、研究を深めていきたいと思っています。

学会誌『電子キーボード音楽研究』書式の原則 改訂版について

学会誌『電子キーボード音楽研究』への投稿に際しては、「投稿規程」と「書式の原則」をご参照いただき、これらに則ってご執筆いただくことになっておりますが、編集作業を円滑に行うため、「書式の原則」を一部改正させていただくことになりました。ご執筆いただく皆様には、何卒ご協力を御願ひ致します。

『電子キーボード音楽研究』書式の原則 改正点抜粋

2. 文書の書式・体裁等（全面改正）

- 論文執筆前に、編集委員会に電子メールで論文のテンプレート（見本）を請求し、それに準じた書式（字詰め、行数、余白、書体、フォント等）で執筆のこと。
- 図表等を入れる場合は、編集委員会で取り扱えない形式のものもあるので事前に相談されたい。また、本文と図表は別々にして、本文中への図表の挿入位置を明示する。編集委員会で本文中へ図表等は挿入する。図のサイズを若干変更させていただく可能性もあるが、不都合があれば校正の際に相談されたい。
- 執筆者は段組を行わず、A4版、横書きとする（編集委員会で本文を2段組にする）。また、セクションや改頁マーク、段組の折り返しなど、区切りに関する設定はしないこと（編集作業を著しく困難にする場合があるため）。

3. 注の付け方（下線部が改正箇所）

本文中で補足説明が必要な場合、また、文献を引用もしくは参照した場合等、適宜該当箇所に注番号を付し、本文とは別に注を作成する。文献の出典については、著者姓名、書名、出版社名、参照ページを記す。それ以上の詳しい書誌情報は末尾の文献リストに記載する。

5. 校正（新項目）

- 校正は、原則として頂いた原稿の体裁を整えた後に一度著者自身が行う。校正後著者から提出された原稿は、不明な点など編集委員会から確認することもあるが、基本的にはそのまま掲載する。
- 校正の際、原文と訂正文が区別できるよう訂正箇所の色や書体等を変える。また、校正箇所が少ない場合は、ページと行数を明示して校正箇所のみ抜き出しても可。

《編集後記》

報告書作成を通じて、本学会の守備範囲が広いことやハードとの結びつきが重要であることを改めて感じさせられました。今年度のパネルディスカッションのまとめで専門分野別の研究部会の設置の提案や今大会の反省と第4回大会に向けた第1回幹事会では、研究発表で配布された資料やDVDなどをライブラリー化しようという意見が出るなど、今後に向けて具体的な動きが出てきました。これらに関しては、幹事会レポートとしてホームページの「沿革」に載せてありますのでご覧いただきたいと思います。

なお「第4回全国大会」は、2008年11月9日（日）、洗足学園音楽大学で行われます。来年度のスケジュール表にご記入ください。（阿方）